

SHOW-HIGH シネマールム

★★★★★

夜の外側 イタリアを震撼させた 55 日間 (後編 エピソードⅣ～Ⅵ) Esterno notte/Exterior, Night

2022 年/イタリア映画
配給: ザジフィルムズ/170 分

2024 (令和 6) 年 8 月 10 日鑑賞

テアトル梅田



2024-60

監督・原案・脚本: マルコ・ベロッキオ
キオ
原案: ジョヴァンニ・ピアンコーニ
/ニコラ・ルズアルディ/ス
テファノ・ビセス
脚本: ステファノ・ビセス/ルドヴィ
イカ・ランボルディ/ダヴィ
デ・セリーノ
出演: ファブリツィオ・ジフーニ/
マルゲリータ・ブイ/トニ・
セルヴィッロ/ファウス
ト・ルッソ・アレシ

👁️👁️ みどころ

2022 年 7 月 8 日の安倍晋三元総理銃撃事件は、政治的背景のない個人による単独犯だったが、前編「Ⅰ 発端 モーロ誘拐」の冒頭に見る「アルド・モーロ誘拐事件」は、極左武装グループ・「赤い旅団」による計画的かつ組織的犯行だ。しかして、その実行を巡る中心メンバーは？

日本では、レバノンのバイルートに住み、パレスチナに赤軍派の海外拠点を作る活動に励んでいた重信房子が「革命の女闘士」として有名だが、本作前編・後編を通して準主人公として登場する“女闘士”は、愛娘と離れて革命運動に身を投じているファランダ（ダニエーラ・マッラ）だ。

日本では、明治維新に向かう幕末の動乱期に「尊王攘夷」「公武合体」等の議論が噴出する中で、その議論が白熱し、多くの（殺人）事件まで登場したが、アルド・モーロ誘拐事件勃発後の政権内部と「赤い旅団」内部の意見の対立は如何に？さらに、妻をはじめとする家族の苦悩とパウロ 6 世の苦悩は如何に？

後編 170 分ではアルド・モーロ誘拐事件のそんな側面をじっくり鑑賞し、ラストに訪れる「Ⅵ 告解 55 日間」の結末をしっかり見届けたい。

—— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * —— * ——

■□■ 15 分の休憩後、後編 170 分の映像に挑戦！ ■□■

イタリアの巨匠マルコ・ベロッキオは、監督 18 作目の『夜よこんにちは』(03 年『シネマ 11』168 頁) で、1978 年に発生した「アルド・モーロ誘拐事件」に挑み、全世界に強烈な問題提起をしたが、それから 19 年後、彼は再び全編 340 分という本作で、「アルド・モーロ誘拐事件」に挑んだ。主人公のアルド・モーロをはじめ政府要人やパウロ 6 世等々

の登場人物はすべて実在の人物だが、もちろん本作はドキュメンタリーではなく、マルコ・ベロッキオ監督の創作劇。その点は、アメリカのオリバー・ストーン監督が、1963 年 11 月 22 日に発生した「ケネディ大統領暗殺事件」を執拗に挑戦し続けているのと同じだ。1973 年に発生した金大中事件は最悪の結果を免れたから、当然ながら、本人からの事情聴取を含む真相説明が進んだが、「アルド・モロ誘拐事件」は最悪の結果になってしまったため、犯人（犯行グループ）が誰かについて、司法的（法的）には明確にされているわけではない。しかし、その犯行が極左武装グループ・「赤い旅団」によるものであることは、マルコ・ベロッキオ監督の確信だ。そのため、前編と後編に分けられ、それぞれ 3 つのエピソードから構成される全 340 分の本作では、冒頭に、「アルド・モロ誘拐事件」の全貌が提示されるが、それはあくまでマルコ・ベロッキオ監督の解釈に基づくものだということが再三強調されるので、それをくれぐれもお忘れないように。

しかして、前編『Ⅰ発端 モーロ誘拐』、『Ⅱ混乱 苦悩するコッシーガ』に続く、『Ⅲ交渉 パウロ 6 世の手紙』では、身代金 200 億リラを用意する生々しい「交渉」の姿が描かれたが、そんな世紀の大交渉も結局は不調に・・・そのような面白い 3 つのエピソードで前編 170 分が終わったが、15 分の休憩を経て、さあこれから後編に挑戦！後編 170 分は一体どんな構成で、どんな展開に？

■□エピソードⅣ～Ⅵのテーマとあらすじは？■□

チラシに掲載されている、「Ⅳ 対立 赤い旅団」、「Ⅴ 家族 エレオノーラの憔悴」、「Ⅵ 告解 55 日目」のテーマとあらすじを転載すると、以下の通りだ。



Ⅳ

対立

赤い旅団

赤い旅団のメンバーであるアドリアーナ・ファランダは、プロレタリア革命は成功すると強く信じ、愛娘と離れ、運動に身を投じている。モーロ襲撃・誘拐で、赤い旅団の活動は順調にいっているかのように見えたが、メンバー間でモーロの処遇をどうするかで意見が激しく紛糾、ファランダも追い詰められていく。



V

家族

エレオノーラの憔悴

アルド・モーロの妻であるエレオノーラや子供たちは、事件直後から、家をマスコミに囲まれ、来訪する議員たちからはもっともらしい慰めの言葉を掛けられる事態に晒されていた。エレオノーラは、夫を助けるため全力を尽くして欲しい、と政府に掛け合うが、ザッカニーニ書記長の返答は…。



VI

告解

55日目

5月8日、目隠しをされたひとりの若い神父が、赤い旅団のアジトのビルの中へと入っていくと、そこにはアルド・モーロの姿があった。54日ぶりに赤い旅団以外の人々と会ったモーロは、「ここで初めて人の顔を見ます」と神父に語りかけ、強く手を握り、告解を始める。

■□■後編はまず準主人公となる“女闘士”の姿を赤裸々に■□■

後編「IV 対立 赤い旅団」の導入部では、アドリアーナ・ファランダ（ダニエーラ・マッラ）が、母親として愛娘の教育や学校のお迎え等に関心を持ち、それとも「プロレタリア革命は成功する」と信じているのだから、その信念を貫き、愛娘と別れて革命運動に身を投ずるべきかに苦悩する姿が描かれる。前編「I 発端 モーロ誘拐」冒頭に見る「赤い旅団」によるアルド・モーロ誘拐事件の手口は、乱暴ながらも鮮やかなものだった。しかし、私がスクリーン上で見る限り、「赤い旅団」のメンバーとして本作の準主人公的役割を果たす女性ファランダが、「赤い旅団」の中心メンバーの男モルッチ（ガブリエル・モンテージ）と共に暮らしているアジトや、「赤い旅団」のリーダー的存在の男モレッティ（ダビデ・マンチーニ）のアジトが人里離れた秘密基地ではなく、普通のマンションの一室らしき所にあるからビックリ！しかも、そのマンションは郊外ではなく、中心部のマンション

らしいから、さらにビックリだ。

日本では、かつてレバノンのペイルートに住み、パレスチナに赤軍派の海外拠点を作る活動に励んでいた重信房子が、2000年11月8日に潜伏先の大阪府高槻市内で逮捕されたことが大きなニュースになったが、本作に見る「赤い旅団」の女闘士ファランダの活躍と、「赤い旅団」内部における彼女の発信力と行動力は如何に？

■□■政権内部の対立と赤い旅団内部が対立する姿に注目！■□■

民主主義国では単独で与党になれば問題ないが、単独で過半数の議席を獲得できなければ連立政権も止むを得ない。それは、いつの時代でも、どこの世界でも存在した中央集権・独裁国家を除いて、古代ギリシャ、ローマ時代から王制、貴族制、民主制を問わず続いてきた人間の権力闘争の姿だ。そんな風に権力闘争の本質をきっちり押さえておくと、本作に見るイタリアのキリスト教民主党内部の権力闘争と、今回はじめてアルド・モーロが連立政権に加えようとしているイタリア共産党内部の権力闘争がそれぞれ興味深い。それは、2024年8月14日に突然発表された岸田文雄総理の自民党の総裁選挙への不出馬宣言によって始まった、候補者乱立模様の自民党総裁選挙を予想しても明らかだ。さらに、今日まで続いてきた日本政治の権力闘争の姿を見守ってきた私には十分理解できる。

他方、容易に理解できないのは、アルド・モーロキリスト教民主党党首を誘拐することでは一致しながら、アルド・モーロの処遇をどうするかで赤い旅団内部の意見が対立していく姿だ。これは1970年代以降、日本の学生運動が分裂を繰り返し、内ゲバを激化させてきた歴史を彷彿させるが、プロレタリア革命が成功すると強く信じ、愛娘と離れ、運動に身を投じている女性ファランダたちの主義、主張は如何に？日本では、1963年3月の吉展ちゃん誘拐殺人事件をきっかけに、通常の営利誘拐よりも重い刑罰を科すことを可能とする「身代金目的略取誘拐」という刑法上の新たな条項が追加された。それを見るまでもなく、誘拐に身代金目的のものが多いは当然だ。しかし、政府の要人誘拐のケースでは、身代金要求だけではなく、何らかの“政治的要求”を釈放の交換条件として突きつけられることが多い。したがって、政府要人の誘拐事件では、解放交渉がより複雑かつより難しくなるのは当然だ。そんな困難な交渉であるにもかかわらず、政府内部でも、赤い旅団内部でも対立していれば、交渉がなおさら進展しなくなるのも当然だ。

現在のウクライナ戦争において、ロシア vs ウクライナ間の和平交渉がうまく進まず、またガザ地区で対立するハマス vs イスラエルの和平交渉がうまく進まないのと同じように、本作の「IV 対立 赤い旅団」では、イタリア政府を代表する①アンドレオッティ首相（ファブリツィオ・コントリ）②レオーネ大統領③ベルリングエル イタリア共産党書記長（ロレンツォ・ジョイエッリ）らと、赤い旅団との間でアルド・モーロの処遇をめぐる交渉がうまく進まない姿をじっくり検証したい。しかし、いくら何でも、55日間の拘束は長すぎる。その間、アルド・モーロはどんな状態に？

■□■イタリアに見る、キリスト教の政治、政党への影響は？■□■

1945年8月15日の敗戦までの日本（大日本帝国）は“神の国”で、“天皇陛下万歳”を叫び、“本土決戦”を戦い、“一億総玉碎”する、と叫んでいた。朝日新聞もそれを主導していたはずだ。ところが、終戦後突如としてアメリカ流の民主主義に転換した日本は、平和憲法の下に基本的人権を擁護し、すべてを投票で決める民主主義のルールを徹底させた。また、戦前の「神道」の力を弱めるため、憲法で“政教分離”を定め、徹底させた。そのため、日本では宗教色を帯びた政党が表舞台に登場することはない（公明党も創価学会とは完全に別物）が、ドイツでもフランスでもそしてイタリアでも、ヨーロッパではキリスト教の名称をつけた政党が表舞台で活躍している上、政権与党を握っている国も多い。まさに、戦後のイタリアのキリスト教民主党はそれだ。

他方、ヨーロッパには教皇制がある。それをここで詳しくは述べないが、アルド・モーロの旧来の友人であるとともに、アルド・モーロが宗教上最も敬愛すべき立場にある人物が教皇パウロ6世だ。彼は、時代の流れの中で不可欠な“歴史的妥協”だと位置づけた上で、アルド・モーロがイタリア共産党との連立政権構想を進めていることに不安を抱いていた。そんな心配の中、アルド・モーロ誘拐事件が発生したわけだが、さあ、そこでパウロ6世はどう動くの？あるいは、あえて動かないの？アルド・モーロ事件を巡るパウロ6世の動きは55日間全てにおいて注目しなければならないが、とりわけ「VI 告解 55日目」にみる、若い神父に対するアルド・モーロの告解の姿に注目！

■□■死亡は必然？それともBプラン・・・？■□■

本作は「I 発端 モーロ誘拐」の冒頭から早々に（？）「赤い旅団」によるアルド・モーロ誘拐事件の姿がスクリーン上に映し出されるから、誰でもこれが事件の真相だと考えてしまいそうだが、それはダメ。そのことは1963年11月22日に起きたケネディ大統領暗殺事件の“真相”を巡ってアメリカのオリバー・ストーン監督が執念深く追及を続け、『JFK』（91年）、『JFK／新証言 知られざる陰謀 劇場版』（21年）（『シネマ55』59頁）を監督している姿を見ればよくわかる。オリバー・ストーン監督もあくまで自分の描く映像が真実だと主張しているのではなく、「それは1つの解釈に過ぎない」と再三強調しているわけだ。しかしそれはマルコ・ベロッキオ監督も同じ。本作でも再三それを強調する字幕が流れるので、本作の鑑賞者はくれぐれも本作がアルド・モーロ誘拐事件の歴史的な事実を伝えるドキュメンタリー映画ではないということをしっかり押さえておく必要がある。

そんな鑑賞眼をキープしていなければ、「VI 告解 55日目」の中でアルド・モーロの耳に“釈放”が伝えられ、現に車のトランクの中で、なお息をしているアルド・モーロが見られるシークエンスを見ると、アレレ、アレレと違和感を覚えてしまうことになる。

もっとも、そんな演出の仕方に賛成かどうかは別。私はあえてそんな仮説のシークエンスをスクリーン上で見せる必要はないと思うのだが、さてあなたは・・・？

2024（令和6）年8月16日記